

弦

愛知県

同人誌相互の交流を軸に

はじめに

「弦」が二〇〇八年に同人雑誌紹介のページを頂いて以来、今回の長沼宏之さんの「睡蓮」の優秀賞受賞に伴い、四度目の機会となった。十二年間に四回というのは、まことに名誉なことである。創刊五十二年、次号で一〇八号を迎える「弦」は中部地方では歴史のある同人誌ではあるが、同人はそれほど多くはなく、どちらかと言えば地味な雑誌かもしれない。いい意味で堅実ではあるが、老人誌であることは言うまでもない。

さすがに四回目ともなれば、会のあらかたは既に書き尽くされた感がある。今回は少し視点を変えて、「弦」と他の同人誌との交流を中心にまとめてみたい。

中部ペンクラブの活動

一九八六年に中部ペンクラブが発足するまでは、「弦」に限らず同人誌相互の交流というものは無いに等しかった。結成以来三十五年、中部地方の同人誌のありようは劇的な変化を遂げた。これによって多くの他誌の作品に接するこ



「弦」の編集委員、左より木戸、國方、長沼、山田、市川、白井



2013年徳島県三好市での同人雑誌フェスティバル前に中村代表、吉村さん、中央に名村・宇佐美・木戸さんら

とができるようになり、会員同士の親睦を図るという効果も生まれた。

まず年一回の総会とその後の講演会。今までの講師には、村田喜代子、中村文則、堀江敏幸、谷川俊太郎、平野啓一郎、稲葉真弓、吉村萬壺、辻原登、中上紀さんなど著名な作家も多い。講演終了後の親睦会では講師も含めて、交流を深めている。

次に、年一回開かれる「会誌中部ペン」を読んでのシンポジウム。中部の同人誌からの公募作品から選ばれる中部ペン文学賞の作品を中心に、会員の掌編小説、エッセイなどについて一般の参加者と共に活発な意見交換が行われる。三つ目は、年二回発行の機関誌「中部ペンクラブ」によ

る情報の共有。会員の作品の批評も掲載される。

四つ目は、押しかけお招き合評と称する合評会。他の同人誌の方々も交えて忌憚らない作品批評を行っている。また、文学散歩と名付けた行事もある。名古屋近郊のホテルに出かけ、文学座談会をしたり食事を楽しんだりする企画である。文芸セミナーでは、小説ばかりではなく他の領域で活躍されている方の話を聞き、見聞を広める機会として

いる。ペンクラブの運営は三田村会長はじめ理事会、文学賞委員会、編集委員会、行事委員会などに属する会員の献身的な活動に支えられている。「弦」からは、五名がそれぞれの会で活躍している。

同人誌による批評コーナー

「弦」では中村賢三代表が、毎号「同人誌の周辺」と題して中部ペンの会員の作品ばかりでなく、他誌の批評も行っている。また、豊橋市の「果樹園」では今泉佐知子さんが「同人誌をちこち」という欄で同じく他誌の批評を展開している。自分の作品がどこかで注目されているということ

は励みになると同時に、多くの人に作者と作品を知ってもらえるという意味でも意義深い取り組みと言える。批評が人を育てるということは、疑う余地はない。

全国同人雑誌会議と共に

第一回全国同人雑誌会議は、二〇〇五年に名古屋市で



『海』100号記念合評会に『弦』などから(押しかけ参加)5名。『海』同人とともに。後列左より、国府・長沼(弦)・宇梶・白井(弦)・白石、前列左より紺谷・山口(富山より)・遠藤・中村(弦)・松島(文炎)

弦の会 〒463-0013

愛知県名古屋守山区小幡中3-4-27 弦の会
TEL 052-794-3430

翌日、五十嵐さんの案内で多摩川沿いの川合玉堂美術館を訪れたことが心に残っている。

特に文芸思潮の同人誌評が、同人誌活動をしている者にとつてどれだけ励みになっていくか計り知れない。同時に毎号発表される作品群はどれも魅力に溢れ、読む楽しみだけでなく創作活動に力を与えてくれる。多くの同人誌作家が、文芸思潮の存在に勇気を与えられていることは想像に難くない。そういう雑誌が常に傍らにあるという幸福をかみしめながら、全国の同人誌の活動がますます盛んになり、交流が深まっていくことを願っている。

終わりに

同人誌活動はいつも順風満帆であるはずもなく、「弦」も何度かいろいろな困難に見舞われた。経済的な問題と同人の高齢化は全国的な問題である。しかし、どんな作品を目指すにしろ、何もないゼロから言葉を紡いで何かを創り出すその喜びを知ってしまった者は、もう文学から離れられないのではないのか。感覚を研ぎ澄まし、社会に向かってアンテナを張り巡らし、知的な好奇心を育てなければよい作品は書けないのだという覚悟が、老化の進む脳細胞を鼓舞する。全国に物を書く仲間がたくさんいるのだという連帯感に、大いに元気づけられる。書き続けるしかない。

(文責/木戸順子)

開催された。講師に村田喜代子さんを迎え、同人雑誌に向けてのお話をして頂き、「同人雑誌という土俵」をテーマにシンポジウムが行われた。五〇〇名ほどが集まり、大成功であった。

第二回は二〇一〇年、徳島県三好市で行われた。全国から五十誌、中ペンからは十五誌、二十八名が参加した。その三年後、同市で富士正晴全国同人雑誌フェスティバルが開催され、「文芸中部」と「弦」が同人雑誌賞特別賞を受賞。中ペンからは七名が参加して交流を深めた。この選考委員の一人である吉村萬壺さんから「文芸中部」と「弦」の作品批評を直接頂く機会を得た。この時のご縁で中部ペンの文学講演会の講師をお願いしたという経緯がある。

第三回は二〇一九年、池坊東京会館で開かれたことはまだ記憶に新しい。シンポジウム「同人諸家の提言と話し合い」では、予定時間を大幅に延長して熱心な討議がなされた。会議には中部ペンクラブから二十七名が参加し、有意義な時間を過ごした。



弦の合評会にはいつも20名ほどが集まる

翌日、希望者による東京文学館巡りが、文芸思潮の五十嵐さんの案内で行われた。

全国同人雑誌会議により、中部地方での広がり留まっていた同人誌同士の交流は、一気に全国に広がっていった感がある。遠隔地の同人誌と雑誌交換も行われるようになった。何より全国にこれほど多くの文学を愛する人々がいるという目をの当たりにして、勇気と力を与えられたような気がする。

文芸思潮の存在

「弦」に関して言えば、二〇〇八年は青梅市、二〇一六年は東京太田区民プラザ、二〇一九年は東京池坊会館での表彰式に参加させて頂いた。誌上で名前しか知らなかった方と直接お会いして言葉を交わすことができるのも貴重な体験である。ここにも文学を愛する多くの人々が参集し、いつも刺激を受けている。個人的には二〇〇八年、青梅市での表彰式の